

# ねこの 通信

猫 養 通 信

第 53 号

平成 15 年 (2003)

10 月 15 日 発行

(年 4 回 発行)

## 結社というもの

青木秀樹

いま連句協会に登録されている連句の結社とグループは241にのぼる。その大部分は会員十名以下のグループである。師系を明示している結社・グループは約半数に過ぎない。それだけ書物などで連句を学んだ連句愛好者が増えているといえよう。

ところで猫養会は、昭和五十七年四月二十一日、松声閣に東明雅先生他十五名のACC受講生が集まって発足したと、秋元正江さんの「猫養会おぼえ書」に記されている。ACCの連句実作の一年間のカリキュラムを終えたいわば一期生が先生を中心に集まったという。その後、次々にACCで受講する方が会員になり、明雅先生と杉内徒司氏が関口芭蕉庵で開催していた「連句教室」の参加者、明雅先生が指導される「柏連句会」、「電通連句会」

のメンバーを会員に加えて拡大していった。

猫養会は創設の経緯からみても明雅先生が創設者であり、主宰であり、連句の指導者であることは間違いない。古くからの会員の方々はこのことをよく弁えておられるが、新しい会員の方にはその辺にある同好の士が集まった連句グループや同好会と同じに考えている方も居られるようである。

すでに明雅先生から「伝道の書」を授与された方々はご存じのことだが、伝道の事として、芭蕉翁以下、北枝、希因、闌更、蒼虬、芹舎、凌冬、芦丈、明雅、〇〇と自分の名前が記されている。芭蕉翁からつながる連句の系統の門弟として認められた証である。

猫養会には師と門弟の関係がその創設当初からあり、猫養会の存在理由も芦丈翁、明雅先生が指導された「猫養の連句」を、会員が切磋琢磨しながら後進に伝えることにある。現に、いまのACC「連句入門講座」は門弟の市野沢弘子さん、佛測健悟さんが講師を務めておられるが、ここで教えるのは市野沢の連句、佛測の連句ではない。猫養の連句を教えているのである。年に四回の猫養会例会、会員を中心とした連句実作のグループ活動においても猫養の連句が実践されているのである。

最近、残念なことであるが自画自賛は俳諧の道に悖る、長年築いてきた猫養会および先生の信用を傷つけるということ、明雅先生が怒り悲しまれることがあった。

先生及び猫養会を傷つけることは会員のなすべきことではない。先生の教えに異論があれば普通は会に止まらない。会の運営は会員の意向を受け止めて行うことが望ましいことは言うまでもないが、師弟の関係はこの限りではない。主宰である明雅先生を尊敬し尊重できない人は、猫養会の会員であってはならない。

猫養会は会員数が多いということだけでなく、他の結社・グループと比し、一座としての連句創作活動が活発であるところに特徴がある。会員が作り出す連句作品は少なくみても年間五百巻は下回らない。芭蕉翁以来の伝統を踏まえ、現代の連句としてふさわしいように修正した猫養の式目は合理的なものであり、誇るに足るものである。しかしながらその式目を振りかざすのではなく、猫養の連句作品の良さを世間から評価されることが重要である。

新しさを求めるからといって奇をてらい、一句の意味のわからないような句を創ること、は先生の教えではない。句のはじめの読者である連衆が理解できない付け句では先に進めない。連衆が互いに競いながら、一方で心を合わせてひとつの作品を作り上げる連句、これを楽しめることが連句人としての資格であろう。連衆心の重要性を先生が説かれる所以である。形式よりも内容において現代の連句としての風を感じさせるように、現代の「世態人情諷交詩」としてより高度のものを会員全員がめざしていきたいものである。

# 立机・文台・号

原田千町

この度は、四名の方が立机し宗匠となられることになり、誠におめでたく、心からお祝いを申し上げる。立机するということは、現代にあつては実に格別なことなのだ、あらためてその意義の大きさを感じている。宗匠は和歌、連歌、俳諧、茶香、立華の師匠をいうが、俳諧の宗匠は曾ては点者、判者と同意語で連句席上、執筆を従え一座の付運びを吟味するとされた。

文台を師から受け、号を許され俳諧師として世に通用することは、近世の俳諧隆盛期では珍しくなかつたであろうが、現代では正式に立机して俳諧師を名乗ることは、ごく稀だと思ふ。各派各流ある中で宗匠といわれていても、立机しての宗匠は少ない。先輩に連句を教えられそれを受け継ぎ、他称、自称で（時には些か揶揄も込めて）宗匠といわれる場合が多く、習いながら付に加わり、巻きながらその折に触れ式目を覚え、巻数を増やし、俳文書を読み漁って理解を深め、やがて宗匠と呼ばれるようになる。そんな経緯をたどるのが一般的であろう。俳諧、特に芭蕉を研究する文学者は多く、その出版の多さは古書、新刊を含めて群を抜く数である。しかし殆どは学問として俳諧を研究し解釈するに止まるようだ。東明雅師は昭和五十六年からACCに於いて連句を教え始められた。明雅師の如

く俳文学者で且つ実作の名手であられるのは誠に稀なことであり、その方から実作と理論を同時に教わり身につけて宗匠となることは真に幸いと言ふべきであろう。

先師芭蕉の立机は、まだ芭蕉を名乗る前、桃青の頃、延宝五年から翌年の春（一六七七―七八）迄の間であつたようだ。当時の立机披露は万句興業（百韻百卷）を行う慣習で、次第に派手になっていたらしいのだが、芭蕉立机については、あまり確かな記録は残されておらず、立机し座興庵を号し、桃青宗匠となつた訳だが、その事については僅かな詞書から推測されるのみで、何時何処でどのような興業されたか、殆ど判明していない。一方延宝元年（一六七四）井原鶴永は大阪生玉の神前で十二日間にわたり華々しく万句興業を行ひ名を西鶴と改め立机し「生玉万句」を刊行しているのが対照的である。

立机は即ち宗匠になること、文台は宗匠の位の象徴でもある。一般には和歌、俳諧の席に用いる机のことで、懐紙、短冊を載せ置くものとされ、古くは榊の枝、松の枝、硯の蓋をもつて文台としたこともあつたようだ。

芭蕉には二見潟文台があり、これは現在、出光美術館蔵となつてをり、桐の一枚板で左右の端に煤竹があしらはれ、右に松原の扇面、左に二見ヶ浦の景が描かれている。裏に

ふたみ うたがふな潮のはなも浦の春

元禄四 芭蕉

とある。他には貞徳伝来の「鳥羽文臺」が有名で、これは玄旨、貞徳、季吟、芭蕉と伝えられたものであり、芭蕉が「猿蓑」を吟声するに当り、わざわざ江戸の芭蕉庵から取り寄せたものだといわれる、この一事からしても俳人にとつていかに文台が尊重すべきものかを知る事ができる。芭蕉にはその他に松本文台、尾花文台、反古文台等々がある。

「席に望みて文台と我と間に髪を入れず、思ふ事速に云出て爰に至つて迷ふ念なし文台引きおろせば即ち反故也」（赤冊紙）とある如く、単に俳諧興業の具たるに止まらず、俳諧精神の象徴ともいふべきものなのだろう。

号について言えば昔、といつても昭和初年ぐらい迄は、文人、画家、学者、俳人はもとより、ちよつとした風流人や粹人は、雅号の一つ二つ持つのがごく普通のことであつた。芭蕉は十九歳の時の「宗房」を初めとして、「釣月庵」「座興庵」「青桃」「泊船堂」、深川の草庵に入つてから「はせを」「芭蕉」を使うようになり、他にも羽々斎花桃天、素宣、天々軒、芭蕉洞、風羅坊・土糞・杖銭・鳳尾・羊角・羽扇・等を庵号、別号、印記として時々用い楽しんでたようだ。

明雅師より号を受け文台を頂き立机される新宗匠方は、それぞれ既にして宗匠の資格は十二分の大ベテランであられるのだ。

何卒今後ともに、益々の御活躍と御研鑽、御指導をお願いし祝辞とさせて頂く。

## 立机のことば

この度、青木秀樹・佛淵健悟・倉路子・橋本鷺子の四氏が東明雅先生より立机のお許しを受けました。慶びの皆様に、立机のお知らせを受けた今の胸中を伺ってみました。

生生庵 青木秀樹

### ・連句との出会い

昭和五十九年八月二十三日、連句とは何かも知らずに、電通会連句部の例会に出席した時。明雅先生に初めてお目にかかったのが連句との出会いでした。ある会社に提案する企画会議で、生活歳時記に則ったプランを立てようと提言したところ、会議終了後に山口美恵さんから「さっき、歳時記と言ったわね。連想ゲームみたいなものだから、連句をやいなさいよ」と強引に誘われた結果です。

### ・連句を始めて良かったこと

学生時代の友人、会社の同僚とはまったく違う多くの連句仲間ができたこと。定年退職後、生活のひとつの柱となっている。

### ・思い出の一座、一卷、一句

馬場東夷著の連句集『春障子』所収の二十韻「梅雨晴」の巻（昭和六十年六月二十一日首尾）。猫蓑会を離れ、いまは連句の筆を折った東夷さんが明雅先生の代わりに電通に来られ、二十韻を教えていただいた。あまりの厳しさに例会への出席者が減り、その日も連

衆四名でスタート。一人は一句も付けずに「仕事を思い出した」と退席、もう一人も裏の途中でリタイア。残った連句初心者二人が雑巾のように絞られることになった。私たちはこの時連句の厳しさを教えられた。

### ・私にとつての連句とは

私にとつて連句は生涯の友。家内にとつては仇かもしれない。「今日は連句」といって頻繁に外出する私に、家内がいい気持ちでない訳がないと思う。連句をすればボケない、長生きするという、そのよい見本である明雅先生を見習おうと思う。

### ・立机のお沙汰を受けて

ありがたいことと思う反面、負けが込んだら引退しなければいけないかな、と思った。物知りな上に、新しいことに好奇心を持つ明雅先生の姿勢を見習い、正統の中で新しさの追求を心掛けた。猫蓑の連句を他と摩擦を起こさないうで、じわりじわりと広めたい。

### ・連句との出会い

南州庵 佛淵健悟

昭和五十三年頃、「カウンセリングと俳諧」という講座を受け、そこで初めて連句を知った。癖のある連句であったが、前句をしつかり味わって付ける連句の心が、カウンセリングに通じるという着眼は、正鵠を射ていたと思う。しかしやはり、連句覚醒は、平成元年四月、ACCでの東明雅先生の「連句入門」

教室に入った時である。

### ・連句を始めて良かったこと

「俳諧の五徳」に言われる通りで、沢山の出合いに恵まれたこと、自分の無知・偏りを思い知ること等、数多くある。酒を飲みながら創作するということは、以前なら考えられなかった。そんなアクロバットが出来るようになったのも連句のお付き合いの賜物だが、今後はこちらの方面は程々にと思っている。

### ・思い出の一座、一卷、一句

平成元年初めて明雅先生の席につかせて頂いたとき、先生が笑いながら「月明にほけ老人を看取るほけ」という付句をされ、連句はこんな風にも言えるのかと、肩臂張っていた緊張がいつぱんに解けた。「事は鄙俗の上に及ぶとも、懐かしういひとるべし」（『去来抄』の生きた実践であった）。

### ・私にとつての連句とは

茶道を「美的趣味の総合大学」と呼んだ魯山人の言葉をそのまま使いたい気もある。加えて自分を真人間にしてくれる道場でもある。

### ・立机のお沙汰を受けて

連衆から浮いてしまうのではないかという迷いもあったが、俳諧の伝統に即し、もう一歩深入りしてみてもどうかとも思った。俳諧の曠野に己を投げ出す腹ができたことも、前向きに受けられた理由である。

明雅先生に選んで頂いた「南州庵」の庵号は、郷里の人間にとっては永久欠番気味のも

のだが、郷土のスターのおおらかさと公平無私にあやかりたいとの願いをこめた。「洲」からサンズイを取って敬意を表した。

### 爽楽庵 倉本路子

#### ・連句との出会い

連句と言うからには五七五の句をずっと続けるのかしら？ 俳諧の連歌という言葉さえ知らず覗いたACCの連句入門講座、実作指導の秋元先生はじめ、俳誌『寒雷』の仲間が何人かいたのには驚いた。その頃は胃腸出血に続く十回目の腸閉塞で腸が破れ、腹膜炎で生死の境をさまよう十年近い闘病から解放されていた。長年続けた和裁教室は再開せず、さて何か面白いことは、という平成二年に出会った連句教室の十年間は本当に楽しかった。

#### ・連句を始めて良かったこと

まず沢山の友人に恵まれたこと、それもすばらしい方々、皆深い教養と知識をお持ちで、若い方にもつきあって頂けて。森羅万象を詠む連句で知らない世界も広がった。何より良かったのは、人生の達人の明雅先生にお逢い出来たことである。

#### ・思い出の一座、一卷、一句

亡くなられた水壺さんには十年近く月一回の連句を楽しませて貰った。どれ程勉強させて頂いたことか。ある時、私の付けた句、

緋の衣脱げば骨皮筋右衛門

に捌が「この句頂きます。釈教も衣類も色も

病体も出てますから。」隣でそれを聞いた水壺さんが例の穏やかな調子で「お言葉ですが私は骨皮筋衛門ですが病人ではありません」お捌きと私、「……」。

#### ・私にとっての連句とは

宗砌の連歌十徳、徳元の俳諧五徳に次ぐ、東明雅の連句三徳は、一健康になる。二毫碌を防ぐ。三友人が沢山出来る、であった。句座の笑いでストレス解消、日進月歩の世に遅れまいとの努力、老後の遊としては最高。連句は私の老後を照らす有難い灯である。

#### ・立机のお沙汰を受けて

浅学非才の私にこんなお沙汰をどうしようという思いであった。大変有難く感謝の言葉もないが遅れ馳せながら、しっかり勉強せねば。そしてこの楽しい世界へ一人でも多くの方をお誘いしたいと願っている。

### 朱鷺庵 橋文子

#### ・連句との出会い

平成元年夏、最上川船下りの旅の一夜に連句の座というものを初めて見た。よく解らなかつたが、解らなくてこれだけ面白いのだから、解つたらもっと面白いだろうと、その方法を聞くと、東明雅著『連句入門』を読めと奨められた。折しも、十月「江戸東京自由大学」の平成連句大茶会。ラッキーでした。

#### ・連句を始めて良かったこと

明雅先生をはじめ、素敵な人々に出会えた

こと。一つことに集中する時間を持てるようになったこと。

#### ・思い出の一座

鹿教湯温泉で、月明に遊ぶむささび一家の姿を、故岩井啓子さんと息詰めてみた興奮をそのまま

むささびの尾を膨らませ月に翔ぶ 正江の発句で正江先生捌きの一座。これには屋根付き橋で拾った青年も加った。

#### ・思い出の一卷

四佳（猫）の会での初捌き「秋興や」の巻。秋発句で途中で素春。正花は冬、月を忘れて挙句に冬月と変な一卷。この時かの名句誕生。冥土の旅はボサノバで行け 水壺

#### ・思い出の一句

月まるしベビ連れ来るこうのとりのとり 文子  
平成四年のACC。その日はたった一日だけ歌舞伎座で、かつての名優の記録映画があり、付句の短冊を提出し早退した。後にこの句が治定されたことを知ったのである。

#### ・私にとっての連句とは

見ぬ世の人をも友としてしまう素敵で高度な遊び。

#### ・立机のお沙汰を受けて

自分が楽しむだけでなく、新しい人たちに猫蓑連句の佳さ楽しさを伝えなければ。上手三人下手二人というが、三人の方は皆様にお任せし、下手の働き所を求めて行こう。地道に蕉風連句の裾野を耕していきたい。

平成十五年六月十五日興行  
於 清澄庭園 大正記念館

歌仙 「父の日の」 下鉢清子 捌

父の日の栗鼠の降りくる櫻の木 清子  
 風吹き抜くる梅雨晴れの庭 朱鷺子  
 パソコンの中級クラス満員に 志世子  
 眼鏡ケースは皮の手作り 守男  
 里山に端正の月さし昇る 澄子  
 珈琲を挽く卓のやや寒 さえ子  
 校長のことは短め運動会 男  
 どのショットにも彼女ばっちり 朱  
 ニューファッション脱ぐときだけに見る艶 同  
 等身大の魚籃観音 清  
 特攻の知覧に残る兵舎あり さ  
 綿虫を追ひ下校する児ら 世  
 御祭り月皎皎と「翁」舞ひ さ  
 世は唄につれ酒肴あれこれ 世  
 空白の時つづり合ひ同窓会 澄  
 使ひ慣れたる太軸のペン 朱  
 豪州に爛漫の花賞づる旅 同  
 春の風邪にもとがる税関 男  
 剪毛期羊も人も身の軽く 澄  
 バーゲンセール市価の半額 さ  
 真贋を見分ける勘を磨きあげ 世  
 朴念仁が拾ふ鏝銭 男  
 夏痩せてお色気増したおちゃっぴい 朱  
 ボートでデート夕暮れの湖 世

エビアンの水の茶漬をさらさらと  
 なすこともなく帰る宰相  
 有事法ひとに向けたる威し銃  
 脱ぎ捨てし靴蟋蟀の鳴く  
 新豆腐賽の目に切りゆるる月  
 特許権もつ絵はがきを買ふ  
 ナウ パースデー白祝の松井ホームラン  
 不審な船がいつの間に増え  
 この頃は肩身の狭い愛煙家  
 ついて行けないテレビデジタ  
 花吹雪帯のごとくに摩天樓  
 見上ぐる方に胡蝶双蝶

連衆 橋朱鷺子 秋山志世子 近藤守男  
 八角澄子 難波さえ子  
 歌仙 「清澄や」 本屋良子 捌  
 清澄や大磯渡る夏燕 良子  
 そよりとさやぐあぢさゐの額 政志  
 鍵盤にをどる指先しなやかに 要子  
 フルスケットで揃ふ前菜 昌子  
 ショベルカー置かれし更地望くたり 久美子  
 秋蚕の小屋をさがす弟 恭子  
 颯爽と時代祭の袴つけ 志  
 女将修行の行儀見習 昌  
 ソクラテス語る夫に惚れ直し 恭  
 己の性は別れてぞ知る 志  
 雪折れの松の葉の色青々と 志

凍月に聞く大リーグ報  
 生真面目なきびばりのめだつ顔  
 犬に洋服着せてお散歩  
 六本木・麻布十番・汐サイト  
 創業競ふ老舗いろいろ  
 花行脚里の香りに誘はれて  
 宮の細螺を鳴らす幼児  
 春塵に背を丸める警察官  
 電話マニアの撃退マニユアル  
 外つ国で杖と頼るはコンセルジュ  
 新型肺炎すこし下火に  
 安穩にやつとなれたと白鼻心  
 ほうたる来いと口ずさむ縁

初恋は浴衣姿の君と僕 久  
 学生結婚してもいいかな 恭  
 ニュートリノ檜舞台に上りつめ 昌  
 スウエーデン刺繍布目数へて 昌  
 群雲の間より見ゆる月の影 志  
 濁り酒などちびりちびりと 恭  
 菊供養おはぐるどぶの今はなく 昌  
 小回りの効く便利ミニバス 久  
 五円足し帳尻合はすレジ係 要  
 鶯餅の持ち重りして 久  
 破笠筆翁の像に花の風 良  
 人去りし苑鐘霞みをり 要  
 \*ブルスケッタ イタリー風カナッペ  
 コンセルジュ 案内人  
 連衆 峯田政志 山本要子 中野昌子  
 副島久美子 式田恭子

歌仙 「父の日や」 蒲原志げ子 捌

父の日や近頃涙もろくなり 志げ子  
 梅雨雷の聞こゆ遠近 好敏  
 心字池水馬すいとめぐりゐて 碧  
 いっきに仕上ぐ推理小説 順子  
 立待の異名覚えし笑顔なり 壽子  
 ほんのり匂ふ菊の被綿 佐紀子  
 行く秋を信濃秘湯へ独り旅 碧  
 朴蘭の下駄の片方がチビ 壽  
 カリスマの巫女の予言に縛られて 敏  
 握られてゐる大き掌 佐  
 札つきの騙し上手に水が漏れ 碧  
 敗者は北へ走るのが常 壽  
 ふるさとへ帰農うながす寒の月 順  
 かじけ猫みて生欠伸する 佐  
 小坊主の又繰り返すなんまいだ 佐  
 村の歌舞伎も衣装くたびれ 順  
 散る花は風の姿をうつつつつ 碧  
 レコーディングを終へて春愁 敏  
 青帝にひんがしの窓開けてをく 壽  
 自動車産業百年の栄 敏  
 CGで銀座いきいきゾルゲ撮る 碧  
 マイバスワードこなす幼子 壽  
 飼はれるる麒麟の首の伸びぬとか 碧  
 避暑地に恋の呉越同舟 敏  
 あの顔でハート奪ふかレース着て 壽  
 老眼鏡を息かけて拭く 佐

鈴本のはねて真っ直ぐ縄暖簾 敏  
 きらずまぶしが健康の素 碧  
 満月に詩を読み合ふホームレス 佐  
 隣誘つて結びの芦刈り 順  
 身にしみる優勝祈願十八年 碧  
 トップジョージョの馬鹿騒ぎする 順  
 チンブンカン微分積分はしご算 敏  
 塵で発電風で発電 碧  
 何故の孤高傲慢盛る花 碧  
 閉ぢる緞帳貽蕩の富士 碧  
 連衆 豊田好敏 松本碧 和田順子  
 杉山壽子 間佐紀子

歌仙 「あぢさゐの」 佛淵健悟 捌

あぢさゐの青に袴めく祈りかな 健悟  
 夏の燕の運ぶ朝焼 洋子  
 喇叭吹噴井に耳を澄ましゐて 實  
 石蹴りしつつ帰る子どもら 一恵  
 月代にもう一局と請はれをり 嫺  
 新胡麻を播るもてなしの膳 あかり  
 村芝居女形には髭の濃き 恵  
 RV車はデート専用 嫺  
 六・六が穴場になつてゐるさうな 恵  
 太郎のゆくへ未だ分からず 洋  
 のんびりと雲の上には飛行船 實  
 日が点となる匍匐前進 り

真夜中に最古の兎見つけ出し 嫺  
 月の下なる寒施行とて 恵  
 腹黒い腹が斑になつてゐる 實  
 選挙の季節跳ねる賽子 悟  
 にこやかに会釈して行く花守も 實  
 東踊のきつぷ貰ひぬ り  
 履物をはき間違へて影朧 洋  
 幽霊坂と誰が名付けし 同  
 ルーマニア共産党のゐた辺 り  
 中庸を得る男こそよき 嫺  
 ほつぺたのおまんま粒を取つて喰ふ り  
 生命保険僕の名義に 洋  
 半珈思惟佛はすべてを諾へり 嫺  
 厨子の中にも樹氷陰翳 恵  
 寅さんが初商の荷をおろし り  
 研ぎ代よりも安い包丁 洋  
 清き月淡き星三つ従へて り  
 小さな筐を馬追が曳く 悟  
 飲み干した猿酒といふ紛ひ物 洋  
 傾きかかる銀行の影 實  
 長命の丸き背並ぶ昼下り り  
 時に喜び時に諍ひ 洋  
 花浴びて痴れ者の血の騒ぐらん 悟  
 遠出の鞍をつける若駒 嫺  
 \*リクリエーションナル・ピークルII遊び用の車  
 \*六本木六丁目

連衆 大島洋子 梅田實 山崎一恵  
 八代嫺 中田あかり

歌仙「鬚剪る」 青木秀樹 捌

手すさびに鬚剪る老師梅雨晴間 秀樹  
 棟の花の充ちる軒先 玲  
 望遠鏡迷彩色に塗られぬて 美恵  
 深海水のボトル携へ 麻子  
 お月見に親しきばかり集ひたる 達子  
 螻蛄かみみずかじりと鳴く音 麻  
 透明の世界ここにも氷頭贈 恵  
 樹海絳由のバスに乗り込む 玲  
 免罪符買ひ集めたる有徳者 恵  
 法王は神ひざまづく恋 麻  
 振り向けば君だけが居てプロポーズ 樹  
 ひとの敷地に捨てる自転車 玲  
 鯛焼きの匂ひゆらりと五日月 恵  
 寝酒は爛で二合半がよし 達  
 回転軸右に左に傾きて 玲  
 返した金をまた借りてくる 達  
 敷石を律義に歩む花盛り 玲  
 ネアンデルタール人風邪をひく春 恵  
 温みゆく水惑星の先行きは 達  
 黒いの赤いの傘をさすなり 麻  
 勲章をずらり並べた厚い胸 恵  
 乃木神社には厩残され 麻  
 父の口のわれにも娘にも父はなく 麻  
 何処かの町に零す遺伝子 玲  
 飽きもせず男たらしの血が騒ぎ 達  
 快極まって痛となる時 玲

同じ字をくりかへし引く国語辞書  
 くじの自家は阿弥陀様とか  
 千曲川滔々として月渡る

商店会の紅葉狩る旅  
 芸術祭みんなミレーになった気で  
 シルバー世代都心住まひに  
 猫にならひ柔軟体操はげみわり  
 古とは知らずのんだ茶柱  
 庭園の池に散りこむ花の雪  
 幼き夢を飛ばす風船

連衆 日高玲 山口美恵  
 内田麻子 篠原達子

歌仙「夏蝶」 長崎和代 捌

夏蝶の溺るる如し草の丈 和代  
 そこはかとなく香る山梔子 路子  
 アロハシャツ派手を贈らん父の日に 淳子  
 携帯灰皿いつも忘れず 啓子  
 踏破してつくづく仰ぐ望の月 英子  
 味噌漬うまさ\*トッピナンポー 路  
 校長のリレー沸き立つ運動会 淳  
 青き剝跡なめらかな頬 啓  
 塩飽姓名乗る男の息荒く 路  
 この仕合はせの中で死ねたら 路  
 ドラマ化の主役務める盲導犬 英  
 せつせと弁当片づける人 淳

月冴ゆる昴六つ星窓に見る  
 軒の氷柱を叩き落して  
 テキーラと芋焼酎とバーボンと  
 ギターに乗せる曲はボサノバ  
 花を追ひ旅を重ねて五稜郭  
 屯田兵の耕しの影  
 タワークレーン操り春の雲の中  
 腕確かなる鍔絵職人  
 鳳凰堂天女の舞の鮮やかに  
 岩の清水に残る伝説  
 くわる鬚捌く行司もはだしなり  
 また政敵に足をすくはれ  
 ひと言がずばりと心貫きて  
 わたし大好き万智の恋歌  
 ギャル達に銭も精気も吸ひとられ  
 見るべきものは見たと百才  
 月を浴び大漁旗を靡かせて  
 隣に分けるはららごの鮓  
 高層の手すりに秋の声を聞き  
 一心に彫る烟水晶  
 登窯火を入れ夢をふくらます  
 棒切れ待ちて遊ぶ里の子  
 晩鐘に万葉の花の散り初むる  
 ポートレースに上ぐる歓声

連衆 倉本路子 上月淳子 小池啓子  
 佐古英子  
 \*トッピナンポー 菊芋 \*塩飽 水軍の姓

歌仙 「浮巢かな」 鈴木千恵子 捌

大川の淵にたゆたふ浮巢かな 千恵子  
 跳び石踏めば香る梔子 千町  
 リトミック教師笑顔で厳格に 暁巳  
 銅像の外交はす一礼 弘子  
 しづまれる公園広場月皎々 富美  
 新の豆腐の味はよろしく 町  
 曝涼の正倉院で般若湯 巳  
 隠し女の歳は不詳で 弘  
 この鍵は会社の鍵と云ひ逃れ 町  
 脇の鸚鵡がぶいと横向く 巳  
 王様のお毒見役は超肥満 美  
 犯人見えぬ推理小説 同  
 月浴びて琴となる木の枯れまさる 町  
 隔世遺伝指の輝 弘  
 モーゼ割る紅海こと観光団 巳  
 エスプレッソの黒きまで濃き 町  
 囁けるごとく揺れたる花枝垂 弘  
 頬ふくらませ風を揚げる子 美  
 痘植うるメスの光の鈍かりき 巳  
 レスキュー犬も乗せてゆくへり 町  
 核のまた見つからずしてまた揉める 同  
 超能力を頼む長官 弘  
 怯えつつ薄翅蜂遊追っ払ひ 巳  
 廊下の明かり二十燭とは 同  
 恋人の数を重ねるプチ整形 弘  
 ヒンズー教のあられなき様 町

南国の廃墟の気根猛々し

拳に咳を溜め込んでゐる

旧寮歌弓張凜と見つめをり

たとうに包む新絹の艶

冬仕度山小屋閉めて丁稚入り

鳥打帽で活動にゆく

ご機嫌の父のハミング「未完成」

喜寿の記念に欧州の旅

花万朶清浄の身へ脱皮せん

高層ビルにかかる初虹

連衆 原田千町 島村暁巳 松原弘子

村田富美

歌仙 「割下水」 青木泉子 捌

青梅雨や傘かしげ行く割下水 泉子  
 塀にこぼるる飯桐の花 孝子  
 パテントの国際事務所立ちあげて かりん  
 縁なし眼鏡丁寧拭く 豊美  
 渡り鳥羽を休める月の山 孝  
 草泊りして語る父と子 孝  
 新蕎麦を打つ男手の鮮やかに 豊  
 麻布十番ブティックに寄り 孝  
 うかうかと甘えじゃうずにはまる畏 孝  
 次の主役を攫ふ雪女郎 孝  
 寒月に櫓太鼓の鳴り納め 孝  
 耳で体温計る空港 孝

原稿は電話取材で済ませやう

端数はヤツに持たすワリカン

白髪を丁髷にしてボランティア

若き芭蕉の復刻の像

花の昼牛屋の框つややかに

壬生念仏の鉦のお稽古

家刀自のきっちり纏ふ春シヨール

どこでも仕切る癖のある人

油差す吾もまた世の菌車か

テールライトの消える隧道

大瑠璃の美声がウリの出湯の宿

おねえ言葉の似合ふいごっそ

宰相に昔名妓の心立て

寝刃起こして交はず盃

ブケガルニ効かせてポトフ煮込むらん

天使は窓に頬杖をつき

枸橘の月は罪さへ許す色

唐臼で搗く五穀雑穀

三峽の沈めるダムに鯀釣る

生きた証にこんな石ころ

包装は再利用紙の和菓子店

育ち盛りの腹に虫飼ふ

デジカメに収まりきらぬ花大樹

家庭菜園土匂ふ頃

\* 洋風煮込み料理に入れる香草の束

連衆 坂本孝子 登坂かりん 高橋豊美

吉村ゑみこ



平成十五年七月十七日興行  
於芭蕉記念館

歌仙「鱻喰べる」 内田麻子 捌

鱻喰べる国の話や梅雨の雷 麻子  
 半透明に揺るるうどんげ 了齋  
 ヘルメット少しななめに被りゐて 澄子  
 穴を巧みに避けし白バイ 千寿子  
 久し振り碁に誘はるる夕月夜 英二  
 尺八かすれ響く肌寒 碧  
 ブランド店柞並木に軒つらね 齋  
 ルーヴルに來て観たい絵が留守 寿  
 はからずも相合傘で駄舎まで 齋  
 恋にも出世払ひてふもの 碧  
 一八年苦節のチームにマジックが 齋  
 あつといふ間に売れる蛸焼 二  
 残業の机に寒の月が射し 寿  
 七五三にはビデオ張り切る 碧  
 あたま山アニメ映画が賞をとり 澄  
 言はぬよりよし節電の沙汰 麻  
 室生寺の塔を埋める花の雲 碧  
 蜂が受粉を果す迷宮 寿  
 春スキークリスチャニアで溪降り 澄  
 瘦も肥満も直す氣功師 二  
 それならと奥の部屋から金の壺 齋  
 世田谷松原空き巣多発す 寿  
 冷房に臍出しルック蒼くなる 麻

上着どうぞとさし出しし彼 碧  
 誘惑の鍵は後悔させないぞ 二  
 秘薬媚薬をためる抽斗 齋  
 今更に弥勒菩薩の細き指 麻  
 雫のやうにトルコ石落つ 齋  
 青き酒眠ると聞きし土に月 碧  
 だだちや豆など取り寄せる母 寿  
 絵葉書は落穂拾ひのミレーにて 澄  
 祈るが如くうづくまる犬 齋  
 氷山が碎ける夢をいつも見る 寿  
 鯨曇にさはぐ老骨 齋  
 淡曇も三春の花もとほき旅 麻  
 こつちこつちと誘ふ小授鷄 二  
 連衆 鈴木了齋 八角澄子 紺野千寿子  
 日高英二 松本碧

踏切の長くは開かぬ通せんぼ 恭  
 雪の任地に出迎えの月 史  
 ローストビーフわさび大根摺りおろし 全  
 決して褒めない野球解説 奈  
 木喰の上人捨つるもの無きか 那  
 あかときの富士くつきりと立つ 那  
 学園に笑ひはじめてミモザ咲く 奈  
 春北風にも付ける番号 恭  
 穴出る蜥蜴に孤独ありぬべし 那  
 手漕ぎボートで世界一周 史  
 フライバシューインターネットで暴かれた 史  
 値ぶみしないで買った油絵 恭  
 忍び込みちよつと見とれる熱帯魚 男  
 レースを透かせ紅のこぼれる 奈  
 亡き妻はお化け館に借り出され 男  
 鬼軍曹の実は臆病 史  
 風呂敷に包んで運び来し葉缶 那  
 宿題をする卓袱台の上 男  
 星今宵唄ひつ踊るフラメンコ 全  
 山高帽子案山子傾け 恭  
 江戸開府祝賀万物放生会 史  
 水柱叩きつ渡る吊り橋 奈  
 拝啓と書きて進まぬ祖父の文 恭  
 マリーといふ名介助犬なり 那  
 爛漫の花に埋もるる測候所 那  
 遅日の丘に語り合ふ夢 奈  
 連衆 式田恭子 近藤守男 鈴木美奈子  
 根津忠史 浅賀丁那

歌仙「砂山」

峯田政志 捌

越えて来し砂山仰ぐ晩夏かな

政志

跣足のままでかける波際

弘子

キーボード背揺らせつつ弾くならん

朱鷺子

パーチャル水槽猫が見つめて

暁巳

高層の窓に近々昇る月

佳之子

幼児ねむるや、寒の椅子

敬子

家苞に産地直売大南瓜

朱

出張先に二号三号

巳

押入に裸の男かくまひて

之

方円自在風呂敷の妙

朱

小吉の神籤大事に持ち帰り

弘

目につんとくるわさび煎餅

之

有明に声高く舞ふ鶴の群

敬

名物駅長厳寒の中

朱

刀研ぐ白づと心鎖もれる

々

俄雨にて濡るる物干

巳

神田川花筏組み大川へ

々

草餅まるくつめる重箱

敬

リストラで団扇作りの家業継ぎ

之

町内会の会計と酌む

巳

暫と出端で見得切る団十郎

朱

総理なんでも丸投げの癖

巳

だぼ鯨のおもしろさうに釣られたる

弘

午睡の夢に麻姑の現れ

朱

ひまわりの迷路で不意に抱かれて

之

わたしは古希であなた還暦

弘

えんま様鏡時々磨かせる

巳

道なき道にのつと出た月

弘

溝萩を書棚の隅にそつと置き

敬

美術展より届く賞状

朱

夷切れ模様合はせもねんごろに

之

仲見世をゆく姉と妹

敬

腰痛は同じ姿勢が禁物と

弘

回転ゴンドラ上下逆転

朱

大聖堂借景にして花盛り

志

階ゆけば黄蝶白蝶

巳

連衆 市野沢弘子 橘朱鷺子

島村暁巳 染谷佳之子 須賀敬子

歌仙「車窓の富士」

杉山壽子 捌

梅雨明や車窓の富士を置き去りに

壽子

風ひきつれる羅の袖

健悟

とくとくと煎茶作法を指南して

利子

猫と一緒に深呼吸する

華蔵

金粉をまきつつ昇る円き月

景翠

忘れ鉢にも小さき露草

かりん

地芝居のほんの端役に必死なり

ん

八分信じて実印を押す

蔵

添ひ寝してくれたセールスマンの笑み

悟

砂糖のお城毀さないでね

ん

大橋をいくつか越えて百合鷗

蔵

月と聴いてる町の遠火事

ん

碁敵のちつと動かぬ盃の底

悟

胸中浅く阿修羅すまはせ

利

ぶつとばすマシンに魂を売り渡し

翠

斜めに切れてしまふ蒼穹

悟

豆腐屋の豆腐の水に花の片

利

小町忌までに爪をととのへ

蔵

みちのくにアイヌ語残り土匂ふ

利

企業トップの相互乗り入れ

翠

銅像の背中に回るかくれんぼ

悟

壁穴覗く赤い垢舐

壽

ほうたるがSOSと飛んでゐる

悟

出水の村へ向ふ救援

ん

三国志読んでそれからゲーム店

ん

娘の羨これだよいのか

蔵

刑法の単位落として恋に落ち

ん

どぶ板一枚わたる悦び

利

清廉を月みそなはず総選挙

悟

なすびの馬に乗せてご先祖

利

哀れ蚊を打たざる罪よ打つ罪よ

利

フィジカル十分走るボウラー

ん

あすといふカードは増えていくばかり

翠

輝いてゐる島の空港

悟

落花の譜名古屋甚句のえも・なもと

壽

春の在所にややを抱く夢

蔵

\*えも・なもは名古屋方言でいずれも語尾「・・ね」の意。同じ意味で下町と上町の違い

連衆 佛測健悟 梅田利子 山田華蔵

岩垂景翠 登坂かりん

歌仙 「名を変へつ」 吉村ゑみこ 捌

名を変へつ流るる川や青薄 ゑみこ  
 にいいい蝉の鳴き初むる頃 淳子  
 パソコンの上級コース楽しくて 達子  
 ロビーに飾る手作りの面 和弥  
 月静か湯煙なびく岩風呂に 英子  
 爽涼の坂主降りゆく 未悠  
 万葉の幸と言はん今年酒 弥  
 膝に乗り来る犬の七匹 悠  
 デイズニーの新アトラクション次々と 々  
 おほきくなつたらパパと結婚 淳  
 そのあしたひめにはきついおむづかり 達  
 何の知らせか寒紅の折れ 英  
 敦煌の壁画に冴ゆる月の光ゲ 弥  
 老いたる教授ステッキを置き 達  
 大リーグ走るイチロー打つ松井 弥  
 結界を越え雀飛び去り 淳  
 花簪遠く山騒聞こえきて 悠  
 草の餅売る村の子供等 悠  
 陽炎を追つて駆けゆくミニバイク ナオ  
 沈着冷静競ふロボコン 英  
 市と町と合併談議埒もなし 弥  
 ご先祖に詫び帰化と決めたる 悠  
 暖簾出し羽目くろぐろとどぜう鍋 淳  
 おーいおーいと呼んで雑踏 弥  
 笑みいっぱい大きな腹の妻を連れ 淳  
 ラブシーンだけBS特集 英

歌仙 「大いなる鯉」 高橋豊美 捌

大いなる鯉動かずや夏深し 豊美  
 ほのかに紅を映す花合歓 孝子  
 調音の古きヴィオロン銘ありて 泉子  
 ブリキのおもちやゼンマイを捲く 要子  
 月蝕に家を追はれた兎です 一郎  
 爽やかに発つ空港の客 一枝  
 ホップ摘む人の小さく見え隠れ 要  
 驢馬曳く車後を追ふ犬 郎  
 道化師の吾が付け睫毛重たくて 孝  
 たつたひとつの神は絶対 全  
 餅搗きのうまいあんたに惚れ直し 泉  
 京の廓で配るポーナス 枝

歌仙 「名を変へつ」 吉村ゑみこ 捌

寒月に瘦身晒す松島屋 孝  
 早口ことばのやうな経文 泉  
 初孫に育児日誌を読み返し 要  
 利尿作用に烏龍茶など 孝  
 花爛漫外人墓地は海に向き 要  
 色とりどりの春のスカーフ 郎  
 株の値をグラフに描く弥生尽 孝  
 どこまで通す世界標準 枝  
 これからは路面電車が復活し 要  
 何とも言はず肌合のよく 孝  
 羅の裾のまつはるもどかしさ 枝  
 別れ話に呷る泡盛 孝  
 戦後処理賠償責任のしかかり 要  
 一段足した跳び箱の段 泉  
 理科室の人体模型盗まれて 全  
 くるりとまはすカレードスコープ 要  
 フィヨルドの滲しらじらと登る月 枝  
 溢れ蚊の来て爺の脛打つ 泉  
 小包に母手作りのきりたんぽ 泉  
 チエミのさのさ俺の持ち唄 郎  
 景気良く道頓堀の川浚ひ 泉  
 住民票をあざらしにやる 孝  
 酩の満漢全席花の宵 泉  
 軽いお風邪を召した佐保姫 枝

歌仙 「梅雨穴」

日高玲 捌

泥鰌かねる大川端の梅雨穴  
 浴衣はしょって覗きこむ吾子  
 ドライブの行程地図に書き入れて  
 つるりと上手くゆで卵剥く  
 珍客を交へ月見の盛上る  
 お国自慢で秋深む頃  
 早贅を忘れて鵞の遠く去り  
 セロのガットが指に食ひ込む  
 振られても女は意地を張り通し  
 遣伝子だけで籍は要らない  
 一頭の馬に馬主が五十人  
 念仏踊り我も我もと  
 右若狭左貴船の雪月夜  
 ぼたん鍋する姉の貫祿  
 中継はメジャーリーグのスター戦  
 夢の字ばかりひたすらに描く  
 清貧を旨とし浴びる花ふぶき  
 つぶやいてみるメーデーの歌  
 戦前は団扇作りに明けられて  
 老の孤独が寄り集ふ縁  
 藪医者に貰ひし薬持て余し  
 酒もほどほど煙草もほどほど  
 クーラーは28℃に願ひます  
 「昼顔」といふひとはいるか  
 いそいそとをのこもすなる薄化粧  
 ペット談議の尽きぬきぬぎぬ

玲 好敏 啓子 和代 代 同 同 代 代 啓 啓 代 代 啓 代 啓 啓 代 代 敏 代 敏 代 敏

外環道ここより地下に潜るとか  
 右肩上り株の情報

啓

望の月魚眼レンズの真中に  
 賞の誉れを懸崖の菊

同

減反田親爺の背な冷まじく  
 人生万事パチンコの玉

同

漱石と子規が下宿の上と下  
 ひとしきり聞く鱈の歯ざしり

同

自転車で自由往来花の旅  
 春風をきる靴は紅

代

連衆 豊田好敏 八代 小池啓子  
 山寺たつみ 長崎和代

同

歌仙 「河童忌」

大島洋子 捌

河童忌や水甕の水あふれたり  
 藪蚊追ひつゝ、開く全集  
 ジョギングの新顔一人加はりて  
 急に警笛鳴らすタクシー  
 留守電に留守をたのみて月の宴  
 まづ手を伸ばす旬の枝豆  
 ひたすらにゴリラの秋思長いこと  
 パントマイムで打ちあける愛  
 振りむくもふりむかざるも多生の縁  
 授業以外も学ぶ教室  
 病院の裏に寺院のある景色  
 猫は自由に通り抜けする

洋子 志げ子 實 如代 秀樹 如 世 世 樹 實

爛酒の酔ひじつくりと積る夜  
 月に届けむ寒弾の糸

樹

刀打つ匠の貌の彫深く  
 長寿の家系継いだ跡取り

樹

花の頃お厭ひなされ船の旅  
 春の帽子はボルサリーノで

樹

目刺焼きいつもの朝食を  
 天気予報は又もはづれる

樹

宝くじグループ買ひの切りもなく  
 虎キチ沸いてマジック点灯

樹

汗しとど解体工事作業員  
 征った親父の白緋着る

樹

セクハラと言はれてかけた丸眼鏡  
 如何物食ひに幼な妻あり

樹

味付は鶏豚がらとお人柄  
 ユネスコ募金振込の紙

樹

八百万神それぞれに望の月  
 高枝に熟れる通草見つけて

樹

美術展初入選の古希の母  
 女だてらば死語となりたる

樹

明烏なんて嘶もありました  
 実地研修手取り足取り

樹

花吹雪花びら撤きつ稚児の列  
 青麦そよぐ山畑の畝

樹

連衆 蒲原志げ子 秋山志世子 梅田實  
 伊勢本如代 青木秀樹

樹

歌仙「青蛙」 青島ゆみを 捌

深川に詩人の形や青蛙  
木の枝払ふ植木屋の声  
航空券インターネットで取り寄せて  
テールブルクロス更紗模様  
夕月に子らまた遊ぶ一輪車  
秋の螢がちらちらと見ゆ  
丸善に仕掛けておきし檸檬弾  
吹き出し口にロングスカート  
赤い糸手繰り寄せたる髭つ面  
星の像は未だ浮かばず  
困つたらミヤウリンガルで猫に聞け  
いつ頃来るのユビキタス殿  
琴の音のほそく凍りて眉の月  
けふ討ち入りとそばを食ひつつ  
米国はイラク北鮮手を焼いて  
税の墓場か国の銀行  
青春の愁ひを包む花衣  
逃げ水を追ふ坂のゆるやか  
斑れ雪消えて連歌の宮古りぬ  
連衆集ひ酒よ肴よ  
骨と皮死語となりはつ街の中  
建築科には碧眼の友  
タイプ打つヘミングウェイスパイとか  
性善説を疑はずをり  
かき氷なめて Love me tender と  
貴方の代はり抱き枕です

枝 義 路 こ 弘 を 枝 路 久 義 こ 久 義 枝 路 を 弘 路 久 弘 子 久 義 枝 路 を 弘 路 久 弘 子 久 義 枝 路 を 弘 路 久 弘 子

海を越え地の果に迄観測船  
ひいき役者が名残狂言  
逆転打虎の四番は月に吠ゆ  
母のかたみの秋袷着て  
リタイアの手話音訳のさはやかに  
南京町の敷石に雨  
仰臥して籠を眺むる建仁寺  
夢幻の姥ざかりを  
花溢れ翁の句碑に時ながれ  
遠き山なみかかる初虹  
\*ミヤウリンガル 猫語翻訳器

連衆 花巻珠枝 副島久美子 生田日常義  
倉本路子 横山わこ 松原弘子

恒例となった「土良の会夏SP」、会員十八名の遊子の参加を得て八月七日、八日の二日間わたって今年も江の島にて開催した。肌寒いような天気が続いたこの夏だったが、当日は凱風快晴、夕方には遙か相模湾のかなたに富士の秀峯を見晴らす絶好の連句日和(?)となった。これに励まされて両日にか

土良の会夏スペシャル

江の島合宿記

林 鐵男

け歌仙四、二十韻三、半歌仙一、胡蝶一(酒恋賦物)を満尾した。  
因みにここ江の島は役行者の開基とされ、文武天皇三年(六九九)伊豆に流されていた小角が東方の海上に瑞雲のたなびくのを見て翌年この江の島に渡り、修験の道場を築いたのを始めとする(江の島縁起)。小角は「鬼神をよく使い妖術を用い妖言を吐く」といわれた。日頃、連句の席ではボキャブラリーの不足に苦しみ、発想の貧困に泣く筆者如きには、実に羨ましいような幻術師である。  
一日目の歌仙終了後は、夕暮れの海を眺めながら入浴、夕食後の自由時間には日中の酒仙振りのせいもあってか、たちまちバタン・キューと健やかに眠りに就く方もあり、あるいは深夜まで歓喜法楽愛別離苦の恋句の世界を追及する向きもあり、俳諧の世界に心ゆくまで浸って楽しんだ二日間となった。  
更に二日目の打上には隣接する件の文佐食堂に赴き談論風発、お店の人が吃驚するほど賑やかにおしゃべりの花を咲かせ、大満足の解散となった次第である。  
連句と平行して席題を設けて発句を募り、参加者の互選によって評価した。題は「新豆腐」「残暑」「流」、左に高得点の句を記す。  
たまさかに上る二階の残暑かな やすこ  
蚯蚓鳴く我れ当流にかかはらず 鐵男  
割り切った筈の二人の新豆腐 一郎

伊勢派散策②「和田希因」  
純正を保つ志

橘朱鷺子

希因は加賀金沢の人、通称綿屋彦右衛門、綿屋と薬種商を業とした。暮柳舎幾因、後に希因と号す。また、百鶴園、申石子の別号がある。

既白の『破れ笠』（宝暦十年）には「先師暮柳は見籠・麦林の門に有ながら風雅は古今に独歩せり」また、「月あかり」の序では「蕉翁の寂しみに麦林叟の花をかざりし先生暮柳」と言い支考、乙由に師事したことを明記している。同門の蘭更は『落葉考』に「北枝を師とし、のち伊勢なる麦林老師の一風をしたひ申されしより口調やうやく一変したるに似たり。されど猶祖翁の遺薫つきず云々」と記す。

蘭更七回忌集『ものやどり』（文化元年）には「半化坊加州人、少学俳諧於希因、々者師北枝、々者師蕉翁、自翁至師正風統系之正實、無出 右者焉」とあり、車人の『道のともし』（文化十二年）に載する金沢蕉門家譜にも北枝からすぐに希因に続いている。最初に師事した北枝が没したのは享保七年刊（一七一八）、希因句の文献初出は享保七年刊の『鶴坂集』の次の句である。  
鶯や梅と竹とをそそのかし カガ 幾因

享保八年（一七二三）の「難陳二百韻」では蘇守の真百韻に加わった。

千載集に鴨はないげな

百姓のむす子が稲の名もしらで

在郷に歌舞伎が戀を置いて行

うき名を流せとて芥川

附句は附句にしてつかざるは附句にあらずと言ひ、かくの如くするものぞ

と示して、一句の作のみを重んじて、前句との附味を顧みない弊を戒めた。

三日月の置所よし初しぐれ  
雲の中見に行鳥や初しぐれ

稲妻や山も寝させて明て行  
蜘蛛の網かけて夜に入木槿かな

三日月の橙心ほそき柳かな  
鶯のあかるき声や竹の奥

鳥の巢を覗いて上る峠かな  
行年やおなし事して水車

きりきりす五山を飛んでひとり住  
引手から夜の明るから紙

都因は涼袋（杖の先）より

享保十六年二月に没した支考への追悼句  
蓮消て分根の池ぞしたはるる 希因

元文四年（一七三九）没した乙由の三回忌に、金沢では希因の

登蓮か薄今知る別れかな

を発句として追善百韻が興行された。

幾暁法師（乙由門）を迎えて

待ち得たり団扇の顔にあたるまで 希因

問るる峰を雲に指差す

幾暁

希因自らは生前一集も編まなかったが、子息後川は「暮柳発句集」四巻を編んだ。

金沢市、犀川大橋南詰のミニパークにある希因句碑には『俳諧百一集』（芭蕉記念館所蔵）にある次の句が刻まれている。  
柴船の立枝も春や朝霞

小此丘尼の道で化粧や杜若  
白帷子の袖に来る風 希因  
朱鷺子



希因の句碑

## 連句著書刊行のお知らせ

国文学関係の出版社「おうふう」より、『連句 その知りたい!』が十月下旬刊行されます。著者は五十嵐譲介・大野鶴士・大畑健治・鈴木千恵子・二村文人・三浦隆の六氏。

平成十一年に同社より刊行の『連句―理解・鑑賞・実作―』の続編として企画されたものです。前回は東明雅先生が著者のお一人でしたが、今回は猫養会同人の鈴木千恵子さんが共著者として加わっています。

前著は、全六章のうち前半が現代連句のありかた、連句の歴史、歌仙の構成について。後半三章が付けの方法、表現上の注意、鑑賞と実作でした。

『連句 その知りたい!』は実践的な連句の作法についてQ&A形式で述べられています。目次は次のとおりです。

- 一章 連句をはじめににあたって
  - 二章 連衆と捌き
  - 三章 季語と季句
  - 四章 用字・用語・題材
  - 五章 付け合いの方法
  - 六章 変化をさせる方法
  - 七章 歌仙を巻く心得
  - 八章 連句の歴史
- 本文二百十六ページ、定価二千元(税)

別)ですが『猫養通信』読者は、著者・出版社のご厚意により一冊千六百円(税別)でお求めになれます。

お申し込みは、はがきかFAXで。

〒101-8340 千代田区猿楽町一

―三―

（株）おうふう 営業部・相川晋様 まで。

TEL 03(3295)8771

FAX 03(3295)8778

送料は実費(一冊・三百円)ですが、十冊以上の一括送付は送料無料となります。

## 事務局便り

### ◇猫養会初懐紙と立机式

日時 平成十六年一月十八日(日)

十一時～十六時半(受付開始十時)

場所 ホテル サンプルト東京

渋谷区代々木二―三―

03(3375)3211

(新宿駅南口から徒歩三分)

当日「猫養会立机式」挙行の後、連句実作会を開催。

### ◇猫養会新会員紹介

林 勝久(俳名 壤)

### ◇『猫養作品集 XIV』作品募集

一人一巻(捌きは猫養会会員に限る)

形式 自由 ただし百韻は不可  
書式 四百字詰原稿用紙B4版・縦書、  
題・捌き名・一順までフルネー

ム・興行年月日・場所を明記

締切 平成十五年十二月末日(厳守)

送り先 梅田利子

〒277-0051

柏市加賀二―十二―

(註)ワープロ原稿可。ただしB4版の

用紙を使用し、余分な文字等は抹消すること。また、手書き原稿は

読みやすく楷書で記入すること。

以上、お守りください。

### ◇『猫養通信』編集担当者について

長らくご苦勞を頂いた日高英二・玲ご

夫妻が猫養会を退会されました。

このため「猫養通信」の編集は、当面

事務局がお預かりいたします。会員各位のご協力をお願い申し上げます。

松本碧 生田目 常義

### ◇猫養会発展基金に

ご協力ありがとうございます。

滝川 雅代様 三万円

匿名希望 千円

・基金の口座は次のとおりです。

みずほ銀行新宿新都心支店

普通 3376045 猫養基金

ことは十年ぶりの冷夏で、プールも海も閑散とし、夏休みを楽しみにしていた子供達はがっかりしたことだろうと思う。

町中を歩いていて気になったのはサルスベリのこと、例年なら晩夏の暑さを煽るように咲くはずのサルスベリに存在感がなかった。

炎天の地上花あり百日紅

高浜虚子

真昼見て百日紅の衰へず

後藤夜半

真夏の炎暑には辟易するが、こうした勢いの強い花に出会えないというのも、何か肩すかしを食らったような、心許ない気分が残る。

歳時記では、サルスベリは漢名に百日紅とあるように、7月と9月と花期の長い花であるが、イメージとしてはキョウチクトウと同じく盛夏の花である。人も草花も極暑にうなだれ押し黙る中で、この花だけは意気軒昂である。それかあらぬか、花言葉は「雄弁」。

私がこのサルスベリという花を意識したのは小学校一年の時、校庭の隅の砂場の脇に植わっていたのを覚えている。変なクセなのであるが、この木の前でサルスベリの名札を見るたび、猿が登る様子を想像する習慣がつき、どうしてこんな木に登らなければならぬのだろうと、観念の無意味な堂々巡りを強

いる花であった。

サルスベリには「紫薇」「白薇」のほか「くすぐりの木」という異名がある。木の肌を指先でくすぐると花が笑うような動きを見せるからというのであるが、『俳諧歳時記葉草』にも「其皮を搔くときは白から動く故に怕痒花と名く」とあるので、こうした俗信は昔から行き渡ったものだったのだろう。

女来と帯纏き出づる百日紅

石田波郷

ずいぶんと前だが、波郷主宰「鶴」の同人でいらっしやった貝母亭清子宗匠に、「波郷さんはおモチになりました」と聞いたことがある。一編の小説を読むような味わいがある。

百日紅雀かくるる鬼瓦

石橋秀野

「鬼瓦」というおどろおどろしいものの後ろに隠れなければならぬような畏れをこの雀は感じているのだろう。軍国主義が色濃くなる時代の中で、表現者は雀一羽の軽さにも足りない、と読むのは主観に過ぎるか。

百日紅学問日々には遠ざかる

相馬遷子

日に輝く百日紅、そして学問のまばゆさを直視し得なくなる年齢もあるのでは。こんな句に共感してしまうこの頃である。

編集後記

◇八月の暑さはそのまま九月にずれこんだようです。長く厳しい残暑でした。体調を崩しておられる東明雅先生は、さぞかしおつらかったことだと思います。一日も早いご平癒をお祈りします。◇来春、初懐紙の日、立机式がありますが、その特集をしました。

臥猫庵原田千町宗匠に、立机についての解説をお願いするとともに、立机される四人の方には、幾つかの質問に答えて頂きました。

◇前号での発句募集講評のコーナーは、立机特集のため今号では休止といたしました。このコーナーについては、皆様の声を反映して遠からず再スタートいたします。

季刊 『猫蓑通信』第五十三号

発行人 猫蓑会 青木秀樹

〒182-0003

調布市若葉町

二一二十一―十六

編集人 松本碧 生田日常義